

第拾七號

# 文明之母第十七號目次




本誌は每月二回三日十八日に發行す

本誌は前金に非れば發送せず

本誌の定價は一冊金六錢十二冊半年分金六十八錢廿四册一年分金一圓卅錢全國無遞送料

本誌の廣告料は「五號活字廿三字詰」當り左の如し

| | (壹回) | (二回以上) |
|---|---|---|
| 壹行 | 金八錢 | 金七錢 |
| 三十行以上 | 金七錢 | 金六錢 |
| 六十行以上 | 金六錢 | 金五錢 |

本誌の見本は郵券六錢を送らるれば呈す

本誌代金御回送の節は內國通運早遞便又は東京郵便局へ御振込被下度

郵券代用は一割增

本誌の前金將に相切れんとする時は其卷の宿所姓名を朱書して發送すべし

主筆　大矢森之助

發行兼編輯人　東京深川區諸町十三番地　中村一

印刷人　東京深川區仲町八番地　小西石造

版權所有

發行所　東京日本橋區大傳馬町二丁目貳十貳番地　生文社

特別大賣捌

東京本郷區元富士町　盛春堂
仝日本橋區小網町四丁目　信文堂
仝京橋區三十軒堀一丁目　巨明堂出張店
仝神田區佐柄木町　東海堂
仝日本橋區本石町四丁目　指金堂
埼玉縣鴻巣町　長島本店

大賣捌

埼玉縣越ヶ谷町　協立舍
仝所澤　尚文堂
仝浦和町　文華堂
仝熊谷町　近榮堂
仝川越町　水村岩三郎
仙臺國分町　三友社
越中富山　眞田善二郎
仝　大橋甚吾
越後長岡　目黒十郎
仝　松田周平

秋田　本間金之助
神奈川　吉川伊兵衛
名古屋　永樂屋
大坂　松村九兵衛
仝　前川善兵衛
和歌山　平井文助
出雲松町　盛進堂
熊本　長崎二郎
仝千反畑　文明堂
群馬前橋　黒崎長三郎


桂舟

文明之母第十七號

明治二十三年一月廿五日發兌



○女子手藝論（承前）

中川重麗譯

若し右の如く無益の手藝に費す所の時間あらんには、宜しく之を他の事業に用ふべし、宜しく之を精神の修養に用ふべし、眞正の美術に用ふべし、必要の家務に用ふべし、然るときには實に意外の結果を得ると疑ひなし。茲に一の金科玉條あり、即ち曰く實用的の敢て他に與へざる時間は之を精神的の爲に奪ふべからずと。故に精神的の敢て他に與へざる時間は之を實務的の爲に奪ふ可からざるとも亦知る可なり。然るに世の女子は前述の如く精神を窒息せしむる厭ふべき而かも健全に害ある手藝に溺れ、他の器械の職業よりも一層有害の印象を其の精神に痕するに

至るは笑ふべき事ならずや。

女子の實用的の此の觀察は全く茲に盡きたるにあらず、他に大切な道德的の關係を說くの必要あり。蓋し規律ある器械的の業務は女子神的の事業に關係あること決して蔽ふべからず。此の注意を以てせば必ず此の修養よりして明識を得べく、卓見を得べく、又正確の思想を得べく。之に反して此の意を用ひざるときは總て此の反對の結果あり。思ふに女子に適せる職務は庖厨の業より他に其の特性に相應せるものを認めず、此の業たる人の想像するが如く無精神の業にあらず、手練を要し才智を要し耐忍を要し又熟考を要するてと他に比ぶれば更に理想的の節度を要し此の節度なくば鹽梅の妙を得ざること必せり。男子に論理學の必要なるが如く女子には適切なる庖厨術の必要あり。妾は眞面目に曰はんとす、聰慧の婦人にして往々輕擧失策の如きは一に事を起すに靜思を缺き事を行ふに耐忍を缺き克己節制事の熟する時期を俟つの習慣を欠くに在り。されば庖厨の業は間接に亦修身上の關係多きを察すべし。故に此の術の諸規則に從ひ巧に菓子を燒き妙にフラッシンク(菓子

の名)を烹る聰敏の家婦人は、己が精神の食品の何は未だ熟せざるに早く公會の卓上に供せられんとを望む世の少女に對して警戒の摸範たり、女子たる者猛省せざる可からず。

尚玆に妾は一歩を進め女子實用的の修養の必要なる所以は、人情的にも亦利益ある一端を説かん。輓近力役社會に職業を授くる中以上の婦人が、賤しき下女及工女の運命に對して、其の關係如何といふことは世人の頗る注意を惹き、妾輩の往々見聞する婦人の無慈悲不正當は深く人の咎むる所となるに至りたり。

抑も柔和ある婦人にして屡此の嫌ふべき過失に陥ることあるは抑も何の故なる歟。音樂を聽きて涙を落す柔腸を有し高尙と美麗の爲には殆ど狂する如き感情を有しながら、何が故に下女其の他の賤女に對すれば、一變して夜叉の如き惡むべき振舞あるや。此の不調子は全く寒冷なる心情より來り、自己主義の熱度より來り、致育の過失より來るものなる歟。

又朋友に對し、小兒に對する慈悲親愛の温容は、抑も亦故意に造りし光彩なる歟。應接の客室には友愛の優美言行に顯はれ、人を魔するが如き

擧動あるにも拘らず、却て庖厨に於いて、火熨部屋に於いて、又縫物部屋に於いては、血を沸かすが如き行狀あり。何ぞ其れ變幻の甚しきや、奇怪も亦甚しと謂ふべし。是れ他なし、此の種の女子は感情の眞正の修養を欲きたる故のみ、是れを以て然るのみ、敢て其の外面に見ゆるが如く惡心あるにあらざるなり。其の實此の如く鬼たらしむる心の惡よりも事物を理解せざるの罪多しとす。此の種の婦人は下女輩の其の勞苦の如何を解し得ざるのみ。一枚の襦絆を縫ふには如何なる辛苦を要するかを知る者は、決して貧しき針婆に向つて其の賃錢を拂ふに吝ならざるべし、啻に吝ならざるのみならず、却て其の價の廉なるを知るならん。之に反して其の辛苦の如何を知らざるものは下等勞役の人種に對し、敢て賃錢を低くせよとて無情なる事をなすに至るなり。蓋し婦人が至當の給金を工女に與ふるは、社會に大影響あることにて、器械的職工の既に失ひし眞價を今日に回復し、理想的の社會を開く革命維新を助くるものと謂ふべし

熟々今日社會の有樣を觀るに女子の職工は其の眞價を失ひて極點に達し、他に類例を見ざる程なり。

宜なるかな下等社會の漸く貧窮を増し

德義從ッて地を掃はんずる勢あるなど。凡そ富有の婦人は錢を人に與へて我が勞を省き、貧窮の女子は力を賣りて麵包を買ふは至當の事なり。

されば逸を買ゝんと欲する者は、其の勞の幾何の價値ありや、自ら之が實驗なかるべからず、相應の給料をも與へず、自ら勞することをも嫌ふは眞に此の世の罪婦人なり。

啻に人情的の事のみあらず、又女性の尊貴を保つにも、婦人は宜しく工女を憐み、相應の給金を以て酬はざるべからず。儉約とは斯かる場合を謂ふにはあらず、儉約は宜しく衣服其の他の裝飾に就いて行ふべし。實用的の家政に無智無能にして自ら之を辨する能はず、他人の補助を要する甲斐なき身にてありながら、賃錢の高下を論ずるなどとは意外千万なり。自ら割烹を爲し能はざる婦人は決して其の厨婢に向ッて、費用の多少に喙を容るべからず。入費の制限を立つるの權なし。規律ある家政の理想を有せざる婦人は、秋毫も家事の費用の多少を論ずべからず、未熟の手を以て事に關係することなかれ。寧ろ萬事を人に托して我が身は死人と一般の境界に居るに如かず。婦人をして斯かる耻づべき境界に陷

らしむるものは一に婦人の無學に在り、思はざるべからず。

此の無學は實に多數の婦人をして儉約と吝嗇とを混同一視せしめ、自ら安じて儉約なりとするも、其の實既に吝嗇の禍機を踏めり。加ふるに此の無學は亦多くの婦人をして奢侈に陥らしむる嚮導なり。又此の無學は多くの婦人をして其の下女及工女に地獄の苦惱を見する鬼たらしむる幻術なり。他人の扶助は唯其の職工の眞價を知る者にして初めて其の貴ぶべきを知るなる可し。未曾て手に針を觸れず、徒に日を送り、舞踏夜會の衣服にうつゝをぬかせる少女の如きは、決して之を知る能はざるなり。

此の如き少女にして異日家婦の地に立たんか、下女の辛苦如何は素より之を知らず、無學の罪は天よりも高くして、擧づべからざる命令を下し、一家の萬事を支配せんと欲するに至ることと必せり。斯かる婦人の笏下に立てる下女の不幸は、實に想ひ遣らるゝなり。此れに由りて之を觀れば、既に人情の一事に關しても、高貴の婦人なりとて手藝の敎育の必要あることを更に論なかるべし。

況んや中等人種の婦人に於いてをや。是れ茲に特に中等人種の爲に手藝の必要を説く所以なり。

嗚呼若し世の殘忍無慈悲の細君が一朝悟る所ありて下女が我が爲に家事を整理し刻苦以て華氈を布きたるにも拘らず不興に其の上に坐し如何に彼れに對して酷なりしや如何に無情なりしや其の非を知るに至りなば其の驚きも亦實に大なるべく何の面目ありて復下女に對せんや。

昔は往々此の類の婦人ありしが今は既に非ざるべし。時既に去り人情の主義は起れり。人情の主義にして幸に婦人の服膺する所とならば侍女たり針女たり火熨女たり皆是れ奴隷にあらず家畜にあらず一家を理する必要の助手たることを認むるに至らん。家婦たり少女たるものは何事にまれ必要を感ずるときには自ら手をして事を爲すを厭はずまた爲すを得べき智識と能力を有し且穩和の心を以て家政を執らば事々物々指呼の如くならざるなく家政の機關は調子よく運行し下女もまた奴隷とならば一家と理むる補翼となるに至るべし。而して其の能く此に至るは唯家婦の腦田に教育の辛苦を以て買ひ得たる一物ありて存するによるのみ。

（完）



左に掲ぐる一篇は、過ぐる日私が四谷衛生會に於いて話しましたことですが、多少衛生の心得にも爲らんかとて本欄の餘白を塡むる事を致しました。

## ○生理經濟

醫學士　山際勝三郎述

世論は囂々として八釜敷鳴り渡りますが、煎じつめた處はその何事たるに拘はらず、二個の極端論と、一個の折衷派の立ち廻りの外ではなく、山好きの仁者は遠慮なく動かざる所に味を持たすが宜しからん、川びいきの智者は何處までも屈曲流通更に拘泥するなきを學ぶ可きなり。勇はなくとも智仁兼備の仲裁家となるも又差支なし。これが則ち自然の經濟、草木が炭酸瓦斯を吸ふて酸素を吐き、此の酸素を動物が吸入し、動植物

あらゆる生きとし生けるものは、一の種芽或は卵より始まりて、だん〳〵大きくなり、成長しきると又れひ〳〵老ひぼれて、終にはお目出度くなる、是れ自も然の經濟なり。其の他一家一國の經濟といふものがありまして皆それ〴〵にその宜しきに適して、宇宙の大巡環とゝもにクル〳〵とまわりまわッて、一瞬間を休む間なく、金もちの息子が馬鹿旦那で、貧乏人の子供が太閤にもなり、今日利得した金が明日に衣食住の商をするもの懐を暖め、何年何月大阪で出來た貨幣が幾百萬人の手裡に入りては、會者定離の惜みを受け、金の置き處に困る人もあれば、ろの日暮しに間なきもあり、せッせと蓄め込む貯金家あり、始終財嚢の下痢に困却する人もあり、千差萬別、有爲轉變の世の中を慧眼もて觀ずれば、いつきてもいつきてもおなじこと。

斯く長々しくも冒頭と置きましたけれども、經濟といふものは唯々物をして其の宜しきに適せしめ、苟そめにも澁滯することなきを申すのでありますから、(巨細のことは其の道の人に御尋ねなさるがやはり經濟)人間れよび動物の生活にも經濟のないことはなさゝうです。してまた實

際「大にありで、」抑々吾人れよび生き物の生きて行く塩梅を説明いたすのが生理學と申します。　それで此の差支なく生物が起居動作して、生長して、枯死いたす成行を生理的と名けます。所でこの生理的の成行即ち現象の中には、自然れよび國學に行はるゝと頗る類似いたして居るばかりでなく、もろッと周密なる經濟が含んで居ります。　して此の完き生理的經濟を能う口に嚙みくだいて、飲みこんで生活してまゐれば、一私人の衞生法いれのづから履行されて居るのであります。

まづ以て生きてまゐりまするのには、食物がなくてはならんと云ふたとは、私が申すまでゝもなく、乳呑兒でも自然と覺えて知ッて居りますから、お腹がすくと啼きます。　又成人に比べますと十五六位までの若き人達は、盛んに食物を喰べます。　これもまたわかりきッたことで、大きくなるには餘計に材料が入るからです。　妊婦產婦の食物が平常よりは多くなり、熱病全快に近づくときは大變餓つきますのも、皆出納の平均を得、尚は別家をさへ出さんが爲のみ。　それから四十の阪を越ると、通例欲張主義が段々增長して來ると同じく、体の内でも貯蓄をする事が始まッて、少

しく肥滿するもので、是れは殊に婦人が男に成るといふのは、例の月華のあがる頃より追々脂肪が、即ちあぶらが附いて來る、といふとおかしい樣ですが、肥滿して來ます。兎に角体内の欠損を補なひ、(家の修復)体温を作り運動を爲す(一家族日々の生活)に必要の食を過冗に攝取すると、あまりし分は脂肪となッて皮下をはじめ、体の内諸處々に落ちついて(貯蓄)居りまして、病氣の時などの補ひを爲します。勿論わかい婦人などが、細りたいはろりたい、と思ふにも拘はらず、ずん〳〵と脂肪がついてまる〳〵と肥へ太ッて、女に固有の狀貌、即ち男兒のやうにゴッ〳〵角立たぬ、先づ圓滿といふ態となるは、何時小兒が出來ても差支ない樣にとの準備と、優さしく見せんとの自然の骨折り、尤も婦人男子に拘はらず、脂肪過多となります(餘り貯蓄し過ぎるも)と害になることがかります。熱病にでも罹ると甚だ危險です。元來人間の体温は節氏三十七度前後が平温で、以上四十度、以下三十度ぐらゐまでが止まりで、之より登るも降るも共にいけません。乃ち人間の体は四十度以上の熱、三十度以下の寒には長く堪ゆるてとは出來ません。所て人間の体温が始終三十七度內外に居るといふも

のは、温の製造と温を体外へ放散謝出する働との間に、丁度宜い比例がついて居るからでありますのに、熱病のときには多分体温の製造が常よりも多過ぎるのでしやう。差もなければ体温を体外へ放散謝出の道に故障があるのが、兎に角人間の体に過冗の温が鬱積いたすのですから、成るべく体温の放散發謝を助けるのが肝腎であります。のに脂肪が多すぎますと、此の脂肪といふものは温を導くことが眞に遲きもの、弱いものですから不都合なのです。又脂肪が体温を導くことの弱い例は、お炊とんが寒むがらんのでも解かッて居ます。

（未完）

## ○結婚の栞（承前）　奇玉散人

第一、身體壯健にして且充分成熟せるもの

凡そ結婚するに當て最も意せねばならぬものは、身體壯健といふ事です。今之を結婚の目的から論じて見ませう。第一に薄弱な男女には子が出來ません、是れ私が保証えます。學理上から論じて見ましても、身體が薄弱であッて、そして生殖機關のみ壯健であるといふ理はありません。

譬へば枝葉の凋んだ木に花の咲かぬれと同様です、假令薄弱な男女に子があッたとしても、其子は必ず不壯健です、天性病身に違ない。親の性質は誠によく遺傳るものです、取別け癩病、黴毒、肺患、痔疾など云ふ病氣は遺傳力の強いものです。

又結果の覿面に知るゝのは、聾啞の類です。千八百七十九年にベルリンの學者ドクトル、ハプトマン氏が獨逸國で調べた結果に據れば、兩親ともに聾啞の者が二家族ありました、甲は兩親共生來の聾啞です、然るに之に五人の子あり、其内四人は女子で聾啞、殘る一人は男子で完全です。次に乙は兩親共二歳と四歳の時に病氣の爲めに聾啞と成たものです、然るに其間に生れたる三人の子、無慘にも皆聾啞です。是等は極端の例を擧げたものですが、兎に角遺傳といふ事は、あるに相違ない。

薄弱なる親、不具なる親からは又同樣な子が出來る、斯くて幾代かの後には、家が滅ぶる樣になります。

斯樣な譯からしてダーウヰン氏は進化論を說き起しました、氏が進化論の主義は適者生存(Survival the Fittest)と云ふ事です、即ち此世に生まれて最も勢力を得るものは、如何ある者かといへば、動物にまれ、植物にまれ、身体の強壯にして最も生活に適ふた者です、

世界は生存競爭(Struggle of Existence)の修羅場です、微弱なる者、不具なる者は此競爭に打破られて、終に絶滅する樣になります。近く例を引て論じませうなら、唯今北海道に棲んで居るアイノ人です、此人種が本と日本の本土に棲んで居た事は、歷史上から調べて見れば殆んど確かな事實です、然し此人種は今の日本人の爲に打破られて、次第に本土を放逐せられ、日増しに勢力の衰ふると共に、種族も次第に滅亡して、終に今の姿となり果てました、夫故今より數百年の後には、全く絶滅するに相違ありません、斯樣に論じて見ますれば、今我日本國を放開して洋人の雜居を許す事は、實に心もとなき事です。

以上の理由のみにても身體薄弱なる配匹の忌むべき事は明です。が、此外にまだ弊害があります、そは身体薄弱な母には難産の多い事です。一体日本では中等以上の婦人は靜穩なる事を貴んで、活潑な動作をする事を卑み、親も之を許さねば、娘も之を好みません。多くは薄暗い坐敷に引籠ッて、窮屈に坐ッて居りますから、生來弱い人でなくとも、身体の發達が兎角充分でありませぬ。さればおそ難産は中等以上の婦人に多い。

御覧なさい、彼の新宿や板橋邊の街道を通る百姓達と、亭主が荷車に大根や人參を載せて牽き、女房が其後推をする、此女房家に在ては暗きに野に出で、暗きに歸り、白晝我家を見たる事なしと云ふ有樣でせう。されば車の後推をして東京に出て來るのは、鬱散作らの働といふ位です。斯る生活をしてゐる婦人の身体は抑も如何でせう、風や雨に鍛へ込んだ上に充分に働きますから、病に罹る事はなし、又食物の消化もよい、消化がよい故に粗末な物を食べてゐても割合に養分が多く得らるゝ、そこで肉肥へ骨太つて、全身の器關が強壯になる、從て產なども至極輕い。今月は臨月と云ふ身重になッても、勞働を節へるでもなし、食物を愼むでもなし、平氣の平左衞門で働て居ます。時によれば途中で急に虫氣がつく、すると道傍の草の上に坐ッて、御自身に良い加減に介抱する、やがて玉の如き小兒を擧げて、身体は忽ち舊に復る。そこで其小兒を犢鼻褌位に包んで、大根の籠に入れ、平氣で車を牽て歸ります、然るにどうでせう、彼の深窓の下に坐して、錦繡と彼つぎ膏粱を食べ、夏は涼かにし冬は暖かになし、若し分娩の兆しなどあれば、名醫良藥屆かぬ隈なく、是非々々々々安產なれかし、と氣遣

はるゝ妹子のやからに、却て難産の不幸多かるとは、白痴の人であらうとも之を怪までゐられますか？、以上の理由によりますれば、薄弱ある男女は結婚の第一の目的に適ひませぬ、然らば第二の目的は如何でせう、是は言でも分る事孫の出來ぬのと、孫の弱い事は、誰しも案せぬものはありませぬ。又子孫がやくざなれば、到底家が榮えません、果ては先祖の遺業を亡ぼす樣な不幸を見るに相違ない。

次に第三の目的に就て論じませう。凡そ夫婦の最大の快樂は互に快活健全なる顔を見て、濃かなる愛情を交換す事にあります。試みに想像して御覽なさい、夫が其日の職業を終いて家に歸る、妻は歸るを遲しと俟ち詫び、それと見るより甲斐々々しく「オヤお歸り遊ばせ、嘸〜ア今日はお寒う御座いましたらう、コレ坊や爺樣がお歸りですよ、早く來てお禮をし、良人もうどんなにか坊がお俟ち申して居りましたよ。併しまアお召しをお着替遊ばせ、あちらに暖めて御座いますから」。ト軈て良人の脱捨たる洋服の塵を拂ひ、丁寧に疊んで簞笥に納める。夫はかくもまめ／＼しき妻君の待遇に、御機嫌もいと麗はしく、其日の勞れも忽ち癒るに相違

ない。然るに之と反對に、妻君が御病身、昨日は頭が重かッた、今日はどうやら胸苦しい、とてつい一日でも麗はしい顔を見せた事がない。今日しも夫は勤めを終へて我家の門邊に立歸る、四邊を見れば誰もゐない、只玄關の昇り口に大袈裟に寐てゐるのが、例も出入の按摩の杖、ヤガテ坐敷に通ッて見れば、忽ち聞ふる子供の泣聲、子守りの下女も持て余まして、ホラ〳〵の聲も涙交り、妻君は屏風の中にて乱れた髪に鉢巻をして、按摩に頭を揉ませあがら、夫への愛想も萎れ聲、「あなたれ歸りですか?」夫は又例の血の道かと思へば、心もいとゞくさ〳〵する。着物を脱ぎ換へんとしても出して呉れる人も無い、據なく不承々々に、やをら箪笥の抽斗を開けて、勤めの服を脱ぎ換へる、其脱ぎ換へた勤めの服も、疊んで呉れる人もない。ろこで良い加減に引纒めて、傍への衣桁に擲げ掛けて置く。さア何となく不愉快で堪らん、疳癪の虫が漸やく首を擡げる、見るもの聞くものが皆じれッたい、軈てピリッとした聲を出して、「オイ坊がアンナに泣くに、一寸哺ませたらドウだ」。歸ると直ぐに妻君に劍突です。

是から私は身体の成熟と云ふ事に就て陳べます。一体女子は男子よ

りも身心共に發育が早い、私が小學校の生徒に就て觀察して見ますに、唯今の學制で、尋常科の間は大抵女子の方が成蹟が宜しい、即ち心意の發達が早いのです。御承知の通り心の發育は、体の發育に伴ふものです、夫故心が發達して居れバ、身体も發達し居るに相違ない。それから又十二三歳以上になれば、女子は急に身体が發育します、夫故身体の養分は筋肉の方にのみ主に吸取られて、心の發育が少し躊躇ます。此時にあッて男女の智力を較べて御覽なさい、女子は何時の間にやら尋常科にゐた時とは全く反對の位置に居ります。即ち智力の發達餘程男子に劣ッて居ります。然し身体を較べて見れば、男子よりも遙に發達して居ります。それから十四五歳になれバ幾ど熟し始める、最早結婚も差問ない者もある。そこで日本の法律では、十三歳以上の女子は最早熟したものと見做してあります。又近頃男女の結婚期を定めて、女子を十五歳以上、男子は十七歳以上とえたとの事。いかさま女子の十五歳といふ年には、結婚も出來ます、又子供も產みませう。が、未だ身躰が充分熟したとは決して言はれぬ、充分熟するのは二十歳です、男子なれば二十四五歳です。此時になッ

て結婚すれば、充分壯健な子供も出來ます。　殊に其頃には稍世の中の經驗も富んで居りますから、家事の取廻はしも出來ます、子の敎育も差問ない。が、痛はしい哉、日本では夫迄待つ人が少ない、女子は十七八歳を嫁入り盛りと心得て居ります、二十歳になる迄も部屋住で居ると、世間の人が恠しみます。　是も道理が無いでは無い、十七八歳の婦人は艶麗です、嬌妍です、言ひたい事も得言はれず、秋水の眼下に紅葉を散らして、顏に口の代理をさするあどけなさ、樣子も優しい、擧動もしとやかです、斯かる妙齡の乙女、斯かるあでやかなる少女、誰しも否ではありません、望しがるは尤もです。　が、結婚の目的から考へて御覽なさい、妻は夫の翫弄物ではありませぬ、床の間の花や園生の草木の如くに、空しく其美を眺めて娯むものとは違ひます。　第一に弱齡の婦人には、必ず薄弱い子が出來ます、御覽なされ、彼の僅かに二三年を歷たる梅櫻、花も咲きます、實も結びます。　が、なさけない事には、輪が小さい、又何處となく萎凋て居て、一向に見ばひが無い、なぜでせう？。　畢竟木が若いからです、人も是と同樣です、十七八歳の女子では、未だ自分の身躰を發育せざる爲に、充分の養分が入ります。　夫

故に懷胎まして も、充分我兒に養分を配つ事が出來ません、養分が乏い故產れた兒の身躰が弱い。さて身躰の弱い兒には、決して勝れた利口はありません。されば此兒成人してから病身で、魯鈍です。さア此兒から如何樣な孫が出來ませう、之は言はでも既に明らかです。實に結婚期の早過ぐるのは末代迄の不幸の種です。

次に今一つの不都合は、子の敎育と家事經濟の上にあります。僅か十七八歲の小娘、申さば未だ子供です、親の手元に居れば、時々スネて見たいと云ふ年頃、斯樣な娘のかよわい腕で、いかで重もい家內の彩配が振られませう？。又いかで子の敎育が出來ませう？。まだ此娘御、御自身が敎育されて居る最中ではありませぬか、それも舅姑など居れば未だしもの事、若し差向ひで御覽なさい、夫の不在には此娘で下女下男への掛引が付きませぬ、又家事經濟も不始末だらけです。それから又子の敎育、それも決していけません、恐らく敎育の主義がまだ立ちますまい、只感情のみで育つるに相違なし。母、の御機嫌の善いときは子が惡い事をしても笑ッて居る、が、御機嫌の惡かッた時、左迄惡くない事でも叱り付けます。又

感情の教育には姑息の愛が多い、例へば母が断然と氣張らねばならぬ所でも、泣かるゝ子の為に折れます、又十分耐へねばならぬ所でも、軽々しく罰します。都て教育に定まッた主義がなくて、同じ事をしても昨日は讃めて、今日は罰すると云ふ様ですから、兒の方にも守るべき標準がありませぬ。そこで母の機嫌のよい時は、何でも勝手の事をします、若し又勝手にならぬ時は泣き散らします、泣けば忽ち勝手になる、勝手になるからして其後は何時も泣く。斯様な具合で子はとう〱不作法になり濟ましま す。諺に云ふ泣く子と地頭にかなはぬ、トは放任主義なる親の言ふ事です。

（未完）



○寄國祝　畠山健

かはらぬを、常とさだめて、見たれども、尙祝はるゝ、國の行くすゑ。

○一月　仝

去年をのみ、夢にすぎつと、思ひしを、又ゑひ／＼て、くらす月かな。

○都初春　町原熙齋

としこもる、との車に、引きかへて、はつはるまうす、くもの上人。

○早春　仝

あづさゆみ、春たちかへる、庭の面に、やまと見るまで、つもる雪哉。

○早春鶯　仝

さきがけて、かをれる梅は、冬ごもり、はつ春名のれ、園のうぐひす。

○龜　橘糸重子

大井川、まつのこかげに、ところねて、心ゆたかに、おろぶかめかな。

○不二　高田顯允

大空に、ひとりそびえて、ならぶべき、ものこそなけれ、不二の芝山。

○寒松　笠川慶治

ふゆきても、おなじみどりの、色みねて、霜につれなき、庭の松かな。

○山家　竹中雍

水のれと、松のあらしを、友として、世をのがれすむ、身こゝろ安かれ。

○埋火　正本久芬

うづみ火の、匂ふあたりに、まどゐして、花まつ心、きざしろめけり。

○硯　西岡訓棟

怠らぬ、人のすゞりを、見てもしれ、石にもすみの、あとはありけり。

○千鳥　佐々木昌綱

よしの川、きよきがうちに、友よびて、さむき夜すがら、千鳥なく也。

○新井白石を祭る時靈代の前に申す詞

文學博士　小中村清矩

花橘の宿かれて、郭公はのかになきわたり、さみだれの軒の雫、やゝ絶間あるころ、淺草なる本願寺の御堂に、筑後守從五位下ありし、新井白石先生

のみかたをかけて、みたまを祭る折に、むしろのしもつかたにまじれる、小中村清矩うなねつきて申さん』、すぐれ人のみたまを祭らんには、在し世のいさをの跡どもをかぞへて、たゝへ言するは常の事なめれど、此の先生の文學の道につとめいたつかれたる、千よろづの人にこえたるのみならず、高き厚き眞ごゝろをめぐらして、幕府の政をたすけ、つかさ位を賜りて、世にたぐひなきいさをゝ立てられし事どもをいひつゞけんは、中々にことさましなるべければ、何かはとてなん、そもけふの御祭わざは、先生をしのべる志深き人々の、其の著し置かれたる書どもを尋ね求めて、すり卷として永く、世に傳へんと思ひたてるあまりに、とり行ふ事にしあれば、その書どものうへを、いさゝかかいつまみて、み前にことあげせんとす』先生の著されたる書はしも百といふ數をみつかさねて、猶餘りある程と聞きしが今の世に其の書の名の傳りたるは、そが半には過ぎざらまし。藩翰譜、折たく柴の記の類なる寫し卷の、大かたの世に彼是とみなしらかへるは、又其の半にだに足らずかし。されバづれの家に秘めもてるにや、又はふつに亡びうせたるにや、知れざるが多かる中に、經邦典例はおほやけのた

め、殊にいたつきて物せられし書にて、田制、貨幣、事輿、冠服、樂舞、職官等の事をあきらめられたる由は、遣文に載せたる此等の考の序に、みえたるものから、清矩が管見には、わづかに冠服考のかたはしのみ窺ひたりき。されど彼序にろれこの考の卷の數をさへ記されしを思へば、かならず全くとゝのひたるものなるべし。又方策合編は、其の序とて傳りたるをみれば、外國と通信せし書の事どもを擧げたるが如く、おしはかられ、西學推問、西學考略、西洋圖說、西洋人物集等は、いかなる體裁ならんははかり難しといへども、思ふに皆羅馬人と、まのあたりうちかたらひて記されたるものなるべければ、要とある事なん多かるべき。これ等の書ども今はいづくにありや敎へ給へと、心の中にねぎかくれど、みかたことゝはす、みかたことゝはすといへども、もろ人の先生を仰ぎ慕ひて、著されし書どもを弘めんとの、眞でゝろをくみしろしめしなば、必みたまちはひて、其のうもれにたる書どもの、四方八方より顯れ出來て、あまたの年をかさねぬうちに、摺卷となしはてぬべし。又思へば慶長元和よりこなた、物學びのわざにすぐれて門戶を立てたるは、伊藤、荻生の兩博士を始として、數へんにはをよび

もそこなはるべし。さて其の著せる書どもは、板に彫てはやう世に行はるれど、大かた經といひ史といふ註釋評論なるが多ければ、其の方ざまのともがらの、學びぐさとのみなれりしを、新井先生の書どもは、專らつかへの道にいでたち、れはやけ事にかゝづらひて成したるものにしあれば、大かたの博士の私物とは、いたう靈なるにより世に憚る事もありて、寫し卷にて傳へたるが多かるを、百とせの久しきを經て、今の大御代にあたり、かく顯れ行て、いはゆる政治學のともがらの資となるらんは、時と書とうちあひて、折に逢たりといふも強言にはあらざるべし』。まおとやけふこゝにかけぬる先生のみかたは、此の六とせばかりあなた、清矩がゆくりなく市に得たるものにして、そがかみつかたに高玄岱の贊を記しゝは、則けふの祭にむねと事とりもてる、大槻修二、文彥ふたりのぬしの父なる、磐溪大人の若き頃の筆の跡なるも、何となうよし有げに覺えければ、やがてけふの御靈代として海山の物を連ね、雅樂の舞曲を備へて、み心をなぐさめんとす。　あはれ先生のみたまよ、かゝる志をめでよろこび給ひて、彌遠長に此の祭の年ごとに榮ゑに榮ゑゆくべう、守らせ給へと、つゝしみうやま

ひて申す。

## ○秋之夜廼漫筆(七)

鈍廼風流士

前々號に掲載したる「亂世婦人の狀況」の「亂世」といふ文字に就き、一考せよとて我遠湖先生は丁寧にも注意されたり。御說の處は如何にも敬服の外なけれども、併し又余がこの「亂世」てふ二字を使用せしは啻に之を獨乙國にのみ應用せし意ならざりしなり。其は歷史にも一目瞭々なれども當時代亂れたるは實に歐洲全土なりき。而して余が第十四號に揭げたるは唯獨乙の部のみなりしが、之より進んで佛蘭西の部を載せんとするなり。なるはどこれが出でざりければ「亂世」の二字は獨乙婦人の心情に對して言ふに忍びずといはれしなるべし。斯く辯せし上は別に一考も要らぬてとゝ思へども、余はまた餘りに字を以て意を害せでも宜しかるべしと信ずるなり。固より淺學の風流士なれば、よろしく御敎示を願ふは勿論なり、別して全文の「みだし」などはいと六ケ敷きものにしあれば、風流士の薄識なるいうで古人の句などを應用

するを知るべき、よろづ御指揮を受けまくはりするなり。

明治庚寅の一月。

## 亂世婦人の狀況(二)

哥西加嶋に生れし少年が鎭めたる彼の騷亂の狀態は如何なる能筆のよく之を寫し得べきぞ。　陰陽序なく、順逆途を異にし、君臣の間何等の義もなく、道德は更になし、叔伯は朝に議事堂に殺され、子姪は夕に斷頭臺に上り、君王頸を延ばし、后妃屍を暴し、かくて紅蓮血潮の海に棹して、共和政治の舟は其の港に着せるかと思ふ間もなく、内には徒黨の首魁刺さるゝあり、外には敵國の合從するありて、この革命の亂ほど亂れしは古今の史乘には稀なることとなるべし。(鐵筆將軍曰、寫之如斯、焉謂不可寫。)　何れの世とて狂婦なかるべき。擾亂を機として私怨を酬ゆるあり、風敎を亂るあり、取る主義の違ふとて偕老を契りし夫を刺して仇に身を委ね、與せる徒黨る他なりとて肉親の兄を殺せる姉妹あり、豺狼に劣らぬ擧動ぞうたてけれ。(又曰、一句斷案。○悲壯感慨、似讀六一文。)　彼のマーノン、ジエアンヌ(ローラン夫人)の如きは、才姿に誇り辯論を挾み、共和の政治に執着し、たゞ狂ふばかりに諸士の間に周旋し、當時商工家、政治家にて

勤王黨第一と聞えたる吾夫ローランをも終には自由の主義に引き入れ議院に上りて高言を放ち、一時は雄々しき行爲も少年の意氣に適ひしど、はては斷頭臺の露と消えしぞ憐なれ。彼のシャルロッテ、マルデイは貴女と人に尊ばれ、榮華に身をば終ふべきを如何なる事に感じけむ、薔薇架の畔に花をも摘まず月にも語らず、兒崙黨に與してより狂奔定めなく、如何なる意馬にぞ鞭うちぬる。自由黨の頭領と聞えし馬拉に打近づき、匕首もて之を刺し殺し、おのれもまた一斧の下に相果てゝ、名を後世まで殘したるは、其が本意なるかは知らねども、渾て女子の德行にはあらずかし。

（又曰議論公平、頗關世敎。）

シルレル氏がものせる鐘歌行にいふ、

都塵蔽レ天、人握レ箭、干戈矛盾滿二宮殿一、慘風吹遍巷里隈、到處烟焰狂又煽、『美人忽化爲二豺狼一、唇吐二毒牙一、眼有レ鋩、一攫深噛仇讐腹、血如二紅纈一裂二其腸一。』豈恐醒二來獅子睡一、豈驚虎兕貪二食餌一、我恐人間心迷時、妖氛冥濛儘二縱恣一、』云々。

（譯詩尤艱、乞大方叱正。）（鐵筆將軍曰、豈恐以下、欠錬。前半奇峭可喜。）

とは是れ佛蘭西革命の乱を賦せしものにて美人忽化の句誠に慘澹を覺ゆなり。嗚呼これ永く後人の哀む所なるべし。

鐵筆將軍曰、心欲レ言筆先到、筆到處自成レ章、非下腹笥瀰二萬卷一者上不レ能也。末段引二西列氏詩一尤佳。

## ○鐵屋の語を記す

岡部虎子

寛正の比かとよ、駿河の國靜岡、其のころ駿府と云ひし地の商人にて、鐵屋何某といふものあり。銅鐵をもてなりはひとし、家ことに富榮ゑけり。若き時は極めて貧しかりしが、假にかゝる身となりければ、世の人の常とて、金蓄ふる道をたつねとふいと者、多かりしが、常に答ふるやう、そはたゞ儉約を守るの一筋たり、とのみいへり。さるに何某といへるは、あだし人にまさりて、頻に來りて、常に儉約のみなりとのたまへど、猶外に傳ふべきことあらば、敎へ給へと切に乞へり。主人いはく、いはるゝ如く、それには口傳あれど、其を人に告げたりとも、必我がいふやうに爲さゞるべし、と思へば唯我れと我が心の內にひめおきて、いかにいはるゝも、答へしことなしと。何某のいはく、さらばそはかたき事なりや。主人云はく、かたき事ならば、中々に其の道を守る人もあるべし、さるに其事極めてたやすければ、かろ〴〵しく思ひて、行ひゑじと思ふ故に、誰にも敎へつる事なし、何某のいはく、さまでやすき事ならんには、あだし人はともあれ、我れは必行ふべし、としひて頼みたり。主人いはくさまで望まるゝ上は、敎へ申すべし、さりながら、極めてやすく、極めておろかなることなれど、必守

りたまふやと。　何某の云はく、そはもとよりなり、かならず示さるゝ事を守らん、と答へたり。　主人さらば明日來りたまへ、とて其の日は別れぬ。　何某はつとめて鐵屋にゆくに、主人のいはく、我が納屋の内に、四斗樽あり、そを井の邊に持行かれよと。　何某いといぶかしき事と思へど、云ふまゝにはこびゆけば、主人また樽の底をぬかしめていふやう、此の樽に終日水をくみ給へと。　何某うたがひて此の樽底なければ、たとひひねもす水とくむとも、一しづくも殘らざるべし。　主人云はく、さればこそ始よりおろかなる事とてこそ云ひつれ、つゝしみて我が詞を守り、怠らず水をくみたまへ、と云ひつゝ内に入りぬ。　何某は云ひつるまゝに、終日水をくみたれど、もとより底なければ、一しづくも殘る事なし。　日も暮れければ、何某は主人のもとに至りて、其の由を云ひしに、主人いはく、今日はそれにてよかなり、又明日來りたまへと、いへり。　次の日、又朝まだきより鐵屋に至るに、主人いはく、けふも又かの納屋より、他の四斗樽持ちゆかれよと、云ふ。　何某は、又底をぬけといはるゝならん、と思へど、云ふがまゝに四斗樽をはこび行きたり。其の時主人のいふやう、此の度はつるべの底をぬきて、水をくめかしと。　何某は、昨日は底なき樽に水を汲ましめ、今日はまたつるべに底なし、あやしき事よ、とおもへど、教のまゝに、たゆまずうまず、水を汲みしに、夕暮にはあふるゝばかりに水みちたり。

こはつるべに底なければ、僅なる一しづくの水の、つもり〳〵て、かくはなりしなり。　されば何某は主人に其の由を云ひたり。　其の時主人形を改めていはく、富人となる秘訣は、則其處にあり、いか

にとなれバ、終日つるべにて汲みとる水は多けれど、受くべき桝の底なけれバ、一滴ものこるあとなし。さるに受くべき底かたきときは、僅の水もつもり〳〵て、四斗桝をあますに至るべし。　それとひとしく、たとひ入る所の金はすくなくとも、心の底のさだまりて、動かざる時は、かやうにつもりて、富人となり得べし。　されバ金を蓄る道は、此の数の外にあるべからず、と云ひしとかや。道をまねぶ人も又かくの如し。　心の底に定まりなき時は、底なき桝に水をくむと同じく、朝に學び夕に忘るべし。さるに心の底に定まりあらば、たとひ一時に學び得ざることありとも、やう〳〵につもりて、遂には博學の人となるべし。　されバ此の事は、富人となるの道のみならず、この心をもて、万の事を行はゞいかなることをもなしとぐべし、と思ふまゝをかくなんしるしつ。



小説はあまり前號ににぎやかなりければ本號には殊に一ど掲げず讀者諒せよ



○初時雨（小本一册定價金十五錢　麹町區三番町昌盛堂發）　　鐵筆將軍

初時雨の一篇は小說壇上に此の人ありと知られたる紅葉山人の著にじて、駿馬の骨、江戸水、口惜きもの、文盲手引草、戀山賤等總て五種の小品をまとめて、小說群芳の第一號として出しやばりたるものなり。其の中駿馬の骨は初ものゝ賣出し、他は皆一度或人の御機嫌とりし舊物なり、讀者決して初時雨といふ一の新しき花嫁御と早合點して、眼を細うしたまひそ。

まづ表紙の体裁は如何。　或人はいふ美しと、或人はいふ雅なりと、或人はいふ入念なりと、或人はいふ奇想なりと、要するに皆いふ立派なりと、上出來なりと。　然れども余はいふ美しからずと、雅ならずと、入念ならず奇想ならずと、素人眼には立派ならん、黑人より看れば不出來なりと。　見よ

唯三月の花よりも紅なるのみにはあらずや。見返しの色紙二枚、これぞ如何にも凝ッたものなり、但し上の一枚の草色に拔かれたる蝶は、少し大きすぐるかと思はるゝが如何にや。』國民之友の紙上に稜骨子なるものあり、此の初時雨の短篇五種を評して曰く、戀山賤を除きては素より小說といふべきものなし、駿馬骨の如き、江戸水の如き、口惜き物の如き、ノベルには非ず、ロマンにては勿論なし、無理に名を下せば一種の隨感錄とでも申さんかと。　然り、眞に然り、余もまた然く信ずるなり、然れども是れ等數篇は、實に一事に觸れ一物に感じたるものを、巧。に。點色したるものにして、畢竟小說てふものゝ能き一部分なり、故に小說をかゝんとするものには、此の上もなき好材料なり。　嗚呼、此の巧なる小說的隨感錄、此の妙なる小說の材料、紅葉子にあらずして誰かまた能く之を作るものある？　而して其の篇々の結構、概ね奇拔なりとは、余は爰に特筆大書せざるべからずと信ず。』紅葉子の文章に就きては、是まで誰しも非難せしものなし、議論せしものなし、否口を極めて賞讚せざるものなし。　然れども余は憎まれ役にも苟も今批評家の位置に立ちたる以上は、遠慮なく所見を陳べざる

べからず。

元來紅葉子の文は歐文らしき所あり、漢文らしき所あり、和文らしき所あり、言文一致体らしき所あり、支考らしき所あり、最も西鶴らしき所あり。而して是れ等の諸文派を紅葉子一個の腕前もて程能く調合し、而して爰に紅葉子一個の文派を成せしものなるが如し。能く世間の作者に看る所あるが、各文派の長處を取るに、往々調合の宜しきを得で、所謂以木接竹体といふ厭ふべき文体と爲すものあり。顧ふに是れ等は唯各文派の長處に眩惑し、之を溶解し、之を調合し、之を自家の腕に現はすの力に乏しきの致す所なり。然れども紅葉子の文は此の難を免る。何となれば力内に足りて外に及ぶものにして、如何なる各文派の長所も、紅葉文てふ鑄型の中に入れ來れば、如何にも作家たるものは斯くあらまはしきものにてそ。然れども余が紅葉子の文を議せんとする所また茲にあるなり。余謂ふ、子は餘りに如何なる文字をも自家の鑄型中に溶解し、盡く自家の文字に化成するを勉め過ぎはせぬかと。先づ世人が趣向も文章も雙絶なりといふ戀山賤に就きていはんに、其の超頭の文字「長閑き春は海よりも遊びは山の事なり。」是れ如何なる意ぞ、無眼者には勿論ヱ

からず、具眼者は亦迷ふ、推察せねば解らぬ文字なり。又「夏までは枯れじと見ゆる深山木の中に立交る一重櫻」是れも巧なりとはいはれじ、又「雉子のほろゝ、山鳥の羽音都の耳珍らしく、」益々怪ならずや。江戸水に就きて再びいはゞ、「いづれも樣でぞんじ、江戸の水は本丁庵三馬家傳の賣藥、外には類と眞似のない代物……似ても似つかぬまッかいなにせ物、誠や式亭の筆勢は一流江戸前、古今獨歩の文中虎……。」如何にも接續詞と働詞とを惜む金の如し、文意解らず(推察せねば)御意わからず。大道端の膃肭賣の口上活寫なり。誰かいふ子が文俗氣と脱すと、俗臭プンプン鼻を撲つにあらずや。然れども京人形より色懺悔、色懺悔より風雅娘と、追々看來れば此の厭ふべき俗臭は、彼の濫用の……☆☆☆と與に漸く減じ去るの勢あり。子も亦爰にお氣つかれしか。されば余が此の評は無用に屬す。無用に屬して却て喜ばしく〱。喜ばしき所にて此の文体論も終るべし。

さて此の隣時雨、否初時雨、初時雨といへども矢張初にもあらぬ此の一篇、(或人曰く表紙を無暗に紅くされたるも至極道理あり)は實二度目には

あれども甚だ別嬪なり、多情なり、多恨なり。寄語す、世上の君子、つまらぬ初度のものよりは、之を召され之を召され、早く机邊に。

○國民之友の新年附錄

鉄筆將軍

この明治二十三年の新年に際し、幾多の雜誌皆大なる附錄を附したり。而して其の最も盛なりしものと國民之友の附錄と、我が文明之母の附錄とを為す。余は今後者を批評するの位置にあらず、乃ち之を他人に讓りて、茲に聊か前者を批評せんとす。

國民之友の附錄は鷗外森氏の舞姬、紅葉山人の拈華微笑、南翠外史の新編破魔弓、及び美妙齋主人の醉沈香なり。其の顏揃なるを見て、まづ誰も一讀を欲せざるものなかるべし。

第一、舞姬。余は夙に森氏の文學に就きての幾多の議論を見、感服せり。又氏の幾多の飜文を讀み、感服せり。而して未だ一も氏の作に係る小說を見ると得ず、いと遺憾に思ふ折から、此の舞姬に接せしことなれば、丁寧に之を一讀したり。一讀して同じく感服せり。其の行文の一鬱蒼

凉なる、森嚴古澹なる、落合直文先生に酷類し、殊に迂餘曲折、字々悲慘を極むる所、自然節を爲すが如く、之を讀むに鏘鏘音あるを覺ゆ。蓋し頃來の文弊は、所謂鄙俚猥雜、骪骳振はざるもの滔々たる天下皆是れなり。而して今此の種の文字の現れ出づるに遇ふ、余は我が文學界の爲に之を祝するなり、之を賀するなり、且又後進者の爲に斯くあれかしと熱心に之を推薦するの勞を辭せざるなり。

殊に五十四頁第二段第十行「かはゆき獨り子を出し遣る母もかくは心を用ゐし大臣にまみえもやせんと思へばならん、エリスは病をつとめて起ち、上襦袢も極めて白きを撰び、丁寧にしまひ置きたるゲーロックといふ二列ぼたんの服を出して着せ、襟飾りさへ余が爲に手づから結びぬ。」などは實に入神の筆といふべし。而して是れ等の筆は啻に爰にのみ限らざるなり――尚各處に散在するなり。最結末の「嗚呼、相澤謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし、されど余が脳裡に一點の彼を憎む心は今日までも殘れりけり。」の「されど」以下の二十四字、如何にも妙絶、覺えず案を拍たざるを得ず。其趣向の如きも斬新なり奇峭なり、面白しとは更にもいはず。

但肝腎なる太田豐太郎がエ―

りネに離合するの一點は、余大に感服するを得ざるなり。

太。田。が。エ。リ。ス。に。合。ふ。處。餘。り。に。愛。の。奴。隷。と。見。ゆ。る。に。あ。ら。ず。や。其。の。エ。リ。ス。に。離。る。ゝ。所、あ。ま。り。に。情。の。仇。敵。と。思。は。る。ゝ。に。あ。ら。ず。や。聊か附記して教を乞ふ。

第二、　拈華微笑。

余これまで紅葉山人の著作を喜ばず、其の趣向を喜ばざるにあらず、其の文章を喜ばざるなり。京人形、やまと昭君、及び色懺悔は暫く論ぜず、風雅娘なり、戀山賤なり、人は皆名文なり奇文なりといふ、而して余其の果して名文なるや寄文なるやを知らざるなり――其は前段の初時雨の評にいへるが如し。而して今此の拈華微笑を讀み、覺ねず微笑して曰く、好文辭なり好文辭なり、斯くありてこそ名文なるべし、寄文なるべしと。行文平坦にして跌蕩縱横、絶ねて山人が平生の奇癖なく、余が所謂鼻を衝くの俗氣此の篇に限り毫もこれあらざればなり。文章に於いて已に喜ぶ、趣向に於いては今更いはでもよかるべし。

第三、　新篇破魔月。

元錄文、殊に西鶴翁頂點に達してより、世また南翠外史を說くもゆなし、余亦しばらく氏の著作を見ず、實に久しぶりにて此の新論破魔弓に接したり。一讀するに相變らず面白し、否氏が作中有數

の文字なるべし。

余之を以て海を觀るに譬ふ。其の初め劉喨たる淸樂を敍し、嘻々たる笑聲を敍し、朧にかすむ春の夜の月を敍し、下萠え出づる嫩草を敍し、淡く隈どる松を敍し、輕く戰げる竹を敍し、而して美人を敍し、貴公子を敍す。猶海の天地澄明、曦景鮮明なるに當り、纖波興らず、風塵飛ばず、鏡如殼如、萬里一碧其の淸以て鑑むべく、其の美以て煎すべきが如し。而して漸くにして淑女の愁狀を敍し、才子の慰体を敍し、老將軍の疑團を敍し、若紳士の辨論を敍し、將に事あらんとするを敍す。猶海の風蓬々然として起り、恬波漸く駭きたるが如し。而して是れよりは早や亂脈なり、英雄の眼より熱淚落ち、佳人の口より壯語出で、遂に怒聲起り、匕首現る。猶海の狂瀾競ひ起り、怒濤爭ひ號び、電の吼ゆるが如く、虎の哮るが如く、淺くして瀨となり、急にして湍となり、奔りて灘となり、懸ッて水簾となるが如し。而して忽にして破魔弓の無心なる一箭、能く魔を破り、萬波又一碧に歸す。其の美、其の奇、其の壯、其の快、實に一大觀といふべし、實に一大觀といふべし。

第四、醉沈香。凡そ何事にあれ、新に一派を創めんとするものは、數多

の辛苦を經ざるべからず、數多の非難を受けざるべからず。美妙齋氏は大胆にも日本向後の韻文に就き、新たに一体を成さんとせられ、其の習練として此の醉沈香をかゝれたるものゝ如し。其の果して此の大事業を創するに足るものあるや否やは、余之を知らず。然れども世人の冷淡に看過ごすことなからんことを望む。「呉竹の、ちひろの蔭に、れははれて、草をも草と、はてろ悟らぬ。」とか。「詩にもあらず、歌るもあらぬ、此のふみをよみとかん人も、あらしとぞれもふ。」などゝ評にはあらぬ罵詈を放つは美妙齋氏の此の醉沈香に對し、失敬極まれる妄言なりと余ハ思ふ。余は切に氏に望む此の如き妄言を放つものには勝手に放させ置き、而して自ら嚮はんとする所に嚮ひ、自ら行かんとする所に行かれんことを。

○法之栞第一號

京都油小路北小路南進德會雜誌部より出でたり。普く眞宗各派の法主の坐誡を始とし、諸大德の法話を輯錄するものありといふ。吾人は果して其の能く未安心の人をして、速に眞俗二諦の宗旨を領解し、現當二世

の御利益を蒙らしめ得るや否やを保せざるなり。　毎月二回發行、定價一册金二錢。



○賤の女歌よみて思ひかけぬ幸を得し話

關根正直

人皇百五代の御門後柏原院の御世知しめす頃は、四海波風騒がしく、天つ日の御光も暫しむら雲に隱れまして、衰周の世にも劣りぬべき形勢なりしが帝いたく蒼生の上を覺しやりたまひて、

をさめしる、我世いかにと、波風の、八十島うけてもく心かな。

と遊ばされき。　あり難き聖慮なりかし。　此の帝大永六年四月七日崩御ありしに、その頃京に桶造りといふ職人の女、年まだ若きがかゝる亂れの

世に聖帝の神避ましゝを歎きて、

れよびなき、雲の上なる、なげきにも、あめが下とて、ぬるゝ袖かな。

賤のをとめあれどやさしき心ばへかなと、人皆賞めあへる程に、あるやとなき公この由を灰聞きたまひて、御感の餘り宮仕へに出だせ、と御氣色を賜はり遂に九重の雲の上まで登る身となりぬぞ。

また櫻町天皇の御宇、延享三年の事ありけむ、下總國岩田の浦の漁夫の女とし十三に成りける者、いかなる折にか讀める

あらいその、岩にくだけて、ちる月を、まどかになして、かへる白波。

此の歌かしこくも叡聞に達し、

下總の岩田の浦に、までかなる、玉のありとは、誰かしりなむ。

との御製に添へて、白銀あまた下し賜はりき。

同じ頃、肥前の國長崎の代官高木作右衛門といふ者、いまだ町年寄勤役の程むすめの年十四あるがよめる、

とぶ螢、ひるはしのぶのすり衣、よるは思ひの、色もみだれて。

あれも上聽に達し、叡感のあまり、大御身近く召使はれて、其の名を摺衣と

めれぬ。

八代將軍德川吉宗公職に在りし頃、御鐵砲組同心相澤宇右衛門の女いめといふ者年十五の春吉書にかきて出だせる歌、

まなべ唯、ゆふべに習ふ道のべの露のいのちはあす消ゆるとも。

此の歌世に流布して、遂に將軍の公聞にも入り、召出だされて御息女利根姫君へ附けられしが、姫君仙臺侯へ御入輿の節も附添ひ參らせて、老年まで召使はれ、御寵愛淺からざりきとぞ、此二人は身の程卑しからぬ者なれど詞才を以て父祖の名を顯はし、其の身も思ひがけぬ幸を得たるなり。

嚮に內藤大學教授の高等中學校に於いてなされたる一場の演說は吾人の輕々に看過すべからざるものなれば、之を前號に掲ぐべくはりせし處印刷の都合に依り、今茲に載することゝなれり。讀者其の晩れたるを咎めず仔細に熟讀玩味して可なり。

○內藤大學教授の演說

余は此の頃校長君の御依賴により、御話を致すべしとの事にて、今日始

めてまかり出でたるなり。其の御話に就きては題名を揭げ置くべき筈なれども、今日始めての事なれば御話も短かく、且つ題名を揭ぐる程のことにもあらねば、唯俗にいふ初對面の御祝儀なりと聽きたまはるべし。其の御話といふは外ならず、我々はじめ諸君も皆その日本に生れて、日本の恩澤をうけたる身なれば、己。れ。日。本。人。た。る。心。を。忘。る。ま。じ。き。と。の。一。事。な。り。さてこれは珍らしからぬことにて、日本に生れたるものゝ日本人たるは言ふまでもなし、といはるゝ人もあるべけれども、昔より外か國々の學文をせし人は多くは其の國の風を慕ひ學びて、何事も其の方に僻することと是れ免れがたき情勢なり。既に彼の漢學をする人の堯舜湯武などのことを言ひ立てゝ禪讓放伐などもあやしき習ひと思はず、又は己れ唐人に似せんとて、其の苗字の長きを一字にして秋元を元といひ、物部を物と稱したる類もあることなり。又昔の蘭學者には今の新暦を用ゐて、日本人にありながら阿蘭陀の元日を祝ひたる人もありき。これも其の國の書をよめば、しらず〳〵其の國の風のしたはしくなることは情の免れがたき所なるべし。然るに今は英佛獨米等の學をなす人多き中には、必その

心もいつの間にか米人英人に化し去ッて、頓と日本たることを忘るゝ人もなしとはいひがたし。

偖又今初めて相見る所の諸子は、是れより大學を歴て世に出でらるゝ上れ、其の郷野の事に從ッて國の爲に民業を勤むる者の外は皆進んで大臣執政にも登るべき人なれば、行末たのもしき人々なり。

然るにもし其の日本人たる心を失ッて、偏に世界に功名を立つる氣になり、徒に西洋人の喝采にのせられ、世界に功を立てさへすれば、日本國の事などは小さきことにて、どうでもよきことゝいふ處より大に國家の禍乱をも引出だすこともあるものなれば、兎に角己れは日本人にてあるといふことは終身わすれず何の事をするも只管日本國の爲にすることゝ思ひて、ひろく外國の書をよまれたきなり。

さて佛法を學べば佛くさくなり、漢學をすれば漢學臭氣を帶ぶるは名賢と雖も免れがたき事にて既に北畠親房公、菅原道眞公の如き人にても、其の學問文章の上には佛臭漢習も大分見ゆれども、是は其の學問上の事のみ其の身を朝廷に致して君の爲に忠義を盡したる所に於いては、少しも日本人の本心を失はず、此くありてこそ學問はいかにもあれ、日本人た

るまでを失はぬ處が是れ大に二公の貴ぶべき所なり。されば英學をするにも、獨學をするにも、心に日本人たることは忘れぬが肝要なり。

北畠准后、又は菅原丞相二公の如きは、古の名臣にて我輩などの迚も及びがたきことゝ、諸君も思はるべけれども、菅公も文學生より出でたる人にて矢ハり今日の大學生と同じことなれば、今の大學生たる人は必ず此の企望のならぬ人にはあらず。必これ國の大臣ともなりて耻しからぬ學問をば備へねばならぬ人々なり。且孔子の學問にていへば學問はもと治國平天下の道を學ぶものにて、道は萬人の上より立てたるものなれば今日一人一家を修むる人の上にても、天下の大道より目をつけざれば眞の修身學はたちがたきことなれば、學問をする以上は菅丞相、北畠公の如き地位に登るとも聊かさしつかへなきほどの學問をなしおかねばならぬこと故に、諸君も常に心を用ゐて、此の二公の學を學ばれんことを希ふなり。

さて昔の大學に文章生ありて、菅公の如き政事にあづかる人材も多くは此の紀傳道の博士（即文章博士）より立身したる人なり。然るに此の文

章博士たる人は皆多く漢籍をよみたる人故に、其の漢に僻することを免れがたき勢ありし故に、中古より文章博士のことには多く和魂(即日本心)のことをかけていへり。赤染衛門の歌に博士の家の乳母のことに大和心をかけて云ひ、又百寮和歌集に文章博士を、

あたらしき文をみるにもくちからじ、よみひらきたる大和魂。

とあり、是れ其の漢學者にはとりわけて大和魂を失はざらんことを求めたる證據なり。されば昔より其の國の書をよむ人は、自然に其の國風の慕はしくなりたる情實のありし故、常にかく戒めたることゝ見ゑたり。此の外漢才にはかならず、和魂を對言せるも其の意また同じきなり。

ろれ學問はひろきにしくはなし、いかほどひろく學ぶは尤好ましきことなれども、たゞこれが爲に眩迷して、遂に英學をすれば英人になり、獨逸學をすれば獨逸人になる樣なるは、以ての外よろしからずと考ふるなり。たゞ其の己れ日本人たることを忘れずして書をよまば、何國の書をよむも悉く我國の爲になることなり。これを日本學生たるの本意とするなり。我朝廷に於いて大中小の學校を建て、人材を養はるゝは、決して他國

の爲にするにはあらず、これもとより我が日本に益する學者を作るが爲に設けられたるなれば、學生たる人も此の意を心頭にわすれず、必らず國の爲に盡されんことを希ふ。もし是れ我國の爲にあらずして偏に他國の用をなす人ならば、之を造るも何の益かあらん。又數万卷を讀むとも、果して何の用をかなさん。所謂獅子身中の蟲なるのみ。

我々少年の時、會澤恆藏、藤田虎之助などに從つて學問せしとき、兩先生共に子弟をして外國の事情をしらんが爲に、飜譯書をよましめたり。其の時は至ッて外國の事をかきたる書の乏しき時なれば、僅かに采覽異言の增譯の如き、後にハ箕作の坤輿圖識、八紘通志などをよみて、外國の事をしらべたることなるが、其の之をしらべたる精神は、全く我國を守るが爲にする精神にて、もし今日にも魯英等の強國より押來るときは、軍艦ならばこれを海上に打碎き、陸兵ならば之を路上に切斃さんとの決心より外國の書をよみたるにて、今の學者のよみかたとハ其の精神大に異なる所ありたりき。

又東湖常にいへるあり、日本紙に和唐紙といへる紙あり。其の紙は日

本に生れながら唐紙といひ、又唐の上に和の字を冠らす、いかにも奇怪なる名なり。然るに今の學者には和唐人甚だ多しとかたられしが、今日或れ和洋人なる者多きやもはかられず。諸君願くは和洋人にならぬ樣用心ありたし。

○餘興

(1)十三といふ數字と分析すれば、古撃劍家の名となり、之に十を加ふれば國名となり、尚は四を加ふれば古豪傑の名となるといふ、何と答へばよろしきか。（周防山田粛子出題）

(2)井の下に橘あり、花は既に散りたり、此物何？（獸名一）（島根　龜谷氏出題）

(3)オシヤヅキの上に、一羽のトリがとまりました。これハ何鳥？（伊勢　夕山人出題）

右三つの考物を悉くお當てになツたお方には、文明之母どの號でも一部差上ます。

前號の考物解答ハ次號に出します。

○新年逝く

新年の勢力は大なり、如何なる所にも和氣をして盈たしむ、如何なる人にも快樂をして滿たしむ。紙鳶天に鳴り、羽子地に音する間は、天地全く和平なり、此の際又忿怒を催すものなし、邪念を懷くものなし。吾人は此の新年が恒に留ッて此の人世を支配せんことを希ふ、而して恒に其支配下に生息せんことを望む。而るに今や吾人を捨つ、彼は逝きたり！

○東湖先生の未亡人聖露に浴す

皇后陛下には舊臘二十八日、主獵局長山口正定氏を御前へ召され、贈正四位故藤田誠之進氏の未亡人山口氏（七十四歳）の存生なる趣を聞食され、親しく懇篤なる御尋ねありたる上、此の品を贈れとの御沙汰にて、御手許より白縮緬一疋と賜はりたるやに承る。

○皇后陛下の御誕辰日を以て國祭となさんとて、曩に加藤かね子より建白したるに、元老院より上奏に及び、内閣の會議にも附せられたるが、遂に棄却に相成りたるやに聞く。吾人も是れに就きては夙に記載したることあり、國祭となさんことを切望したり。然れども能はずとならば止むを得ざることながら、吾人民臣の誠意を以て、毎に其の御誕辰日を祝し奉らは、何ぞ區々たる名義なきを憂へん、何ぞ區々たる名義なきを憂へん。



○今年の女學界

今年の女學界は去年よりも望み多し、流行的の輕薄者いよ／＼此の社會を見捨て、恰も西隅の天に走りてコロ／＼と鳴り響くあるべし。天上潔快、雲氣明晴、今年こそ最と靜かに女子教育の根本を固むるの年なれ。而して更に喜ぶべきは今年には眞の詩、少しは萌れ出づべけん、小説にも戯作にも、冷々輕薄なる批評にも、人は既に厭きを催ふせり。今後忙絕紛乱なる政事界を融和するものは、唯眞の女學生と眞の詩にてなるべし、讀者此の預言者の忘想當るや否やを判斷せよ。とは女學子の預言せし所なり、然れども吾人は或は當らざるべしといはんとす。何を以て之を謂ふ、曰く、

○日本男子は輕薄なり、日本女子も亦輕薄なればなり、流行的の輕薄とは故なくして之有るものにあらざるなり。吾人は恐る、一般の耳は皆忙絕なる政事に傾き、一般の目は悉く紛乱なる政學に注ぎ、手も政事の爲に動き、足も政事の爲に歩み、筆も舌も悉く皆政學の爲に使役せらる、女學界は過般の横濱街路の如く、全然暗黑となりはすまじきかを。然れども是れ亦預言のみ、當るも八卦なり、當らぬも八卦なり。而して吾人は自ら其の當らざらんことを切望するなり、自ら其の當らざる樣に奮勉せんとするなり。

○今年の文學界

借問す今年の文學界は如何。曰く、或は又政界の狂熱の爲めに幾分か沮遏せられ、妨害せらるゝことならん。然れども此の駸々として進步し來りたる氣運は、全然挫折し了するとも覺へざるなり。而して書肆は日く、今年は文學的の出版ものは決して爲さゞる積りな

り、出版せば必らず損せんと。

○書目の豫言

右の一項をかき終る時、恰も國民之友机上に至る、之を繙き時事欄を見るに、書目の豫言と題して實に次の如くに記しありたり。豫言者銀座街頭に降る、書肆の主人を集めて告げて曰く、本年に出版せらる可き書目を汝等に豫言せん、國會議員列傳、議事法、國會議員必携、郡制府縣制注釋、民法注釋なりと、書肆の主人其次ぎを問ふ、豫言者語塞がり、頭を掻きて其の影を藏くす。と吾人は讀み了り、筆を投じてア、。

○婦人洋服の害

ウィルラード女史へ、去る十一月の米國婦人禁酒會大會に於いて、例の如く會頭年回演說と爲したる中に、嚴しく婦人洋裝の弊害を論じて、コルセットの類の大害あることを證し、

若しエヂソン氏の腰蜂の如くなる程に〆めたらば、最早や發明を爲すの力あるまじ。ビスマーク氏の背に張りを壓し付けたらば、獨逸の聯邦は遠からずして破るべし。ロバート、ブローニンにコルセットを固くせしめたらば、又美なる詩吟を聞くことを得じ。パーチルにペテコートを穿たしめば、自治案は到底行はるゝ望みあらじ。余にして若し投票の權を有するとせば、明日シカゴ府に赴きて知事の撰擧に一票を投せんよりハ、今日蜂の如き腰、道ばうきの如き裾、駱駝の如き後ろを作る女服に反對するの十字軍に加擔し、一臂の力を呈すべし。

と迄に痛論ありぬ。と女學雜誌に見ゑたるが、勿論最極端論ともいふべきに過ぎざれども、醉洋者流に示すには最良の好材といふべし。

○學位褫奪の制

帝國大學に關係ある學友の相會して組織せられし學士會にては、此の度學位褫奪の制を設けられんことを、榎本文部大臣に建議せんと目下協議中の由に聞く。學位或は學士號を有するもの、固より榮譽を尊重し、其の令名優過に協ふべきは勿論のことながら、若し榮譽を汚辱すべき所爲あるときは、其の位號を褫奪せらる可きは是亦如何にも勿論の事なり。且夫れ雲あり之を蔽ひ、風あり之を散らすを以て、花月は益々愛惜する所と爲る也、褫奪の制ありて博士學士の稱號も、愈〻光を増さん、増々重を加へん。

○日本の菓子折

記者も人間並に新年の禮を爲したり、年玉といふものもろ〳〵知己に贈りたり、隨ッて又人間並に禮も受けたり、年玉も貰ひたり。其の貰ひたる年玉の數多ある中に、いと立派なる菓子折ありぬ。之を開き見しに臭氣鼻を衝く、蓋し餘程各處を經廻り來りて、己に腐敗し去りたるなり。是に於てか思ふ、去年記者病に臥せしとき、一知已より榮太樓製のカステーラを贈られしを。其の折には何月何日製造てふ附牌ありたり。成程名法あり、一般の菓子屋皆斯くなしては如何、其の營業に損する所なくして、社會を益すること大なるべし。

○ブローニング卒す

テニソンに次ぎて人望多かりし英國の大詩人、ロバ

ート、ブローニング氏は去月十四日を以て卒したり。悲しむべきことにてろ。氏ハ千八百十二年サレー郡カンベーウヰルに生れ、二十歳の時を以て伊太利に遊び、同國の中古史及び人民の狀態を研究し、千八百三十五年始めてポーラインといへる詩を著はし、爾後年々詩文の著作多く、漸く名聲天下に轟けり。千八百八十二年オックスフォード大學よりデーシーエルの學位を受けたり。嗚呼今や此の大詩人逝く！

## 寄書

○讀文明之母　北總　松蔭　松本寛

雜誌盡可以讀乎曰非也盡不可以讀乎曰又非也然則如何而可乎曰如之明之母而可讀也否者不讀則可矣何謂文明之母獨可讀而他則不可讀呼曰論說之優美而確實高尚而溫雅不偏不黨蕩々平々因以有裨補於世道人心也

又

一日友人兩三輩訪余書室坐定而談及於流行之雜誌余曰方今雜誌雖多論說之雄深而雅健不偏於我不癖於漢不泥於洋皆不能通於上下而易解以有益於世道者僅々不過數種也餘皆不能猥褻則偏僻而不足觀耳時一友似小冊子於懷中曰諸君未見斯猥褻之冊子歟所謂雄深而雅健免猥褻之嘲偏癖之謗能通於上下而易解以有益於世道者夫非此之冊子乎余把而朗誦一過不覺呼快曰如彼山岳之峨々不動者社說在焉如江海之洋々無際者論說在焉或花前月下如粹人通客之留連於狹斜中或慷慨烈士之談時事而悲憤慘愴者或楊柳之櫛于風海棠之沐于雨者非小說乎如溪南之寒梅槎枒馥郁九重之春櫻婀娜嬋娟艶美優麗不可名狀者非揷畫乎其他黃鸝之喈々蜂蝶之翩々千狀萬態愈出愈巧者非批評文藝雜錄彙報之類乎嗚呼有此文明之母焉子女敎育之方可以隆盛勸善懲惡之法可以喚發禮義廉恥之風可以興起信可謂不背于其名矣莊周有云名者實之賓況既於名實兼備之此冊乎余則知彌益進而不止擴張而至于汪盛則雜誌中得北山泰斗之稱企而可必待也諸君以爲如何衆皆曰然既而客去余則咏國風一章曰玖佐具沙能婦美乃波夜志廼曾乃奈加邇香遠理由加之伎布美波古能夫美

○讀二文明之母一　青森　春窓漁夫　谷山了海稿

◎忽然トシテ途上。鶴髮弓腰ノ老翁ニ逢フ。翁訝テ余ニ謂ヘラク。子ハ是蜻蜓州尾ノ蟹舍ニ棲ム漁夫ニ非ズヤ。何故ニコノ處ニ散策セルヤト。余之ニ應ジテ曰ク。余ハ暇夷ノ邊陬ニ住スル久矣。聞ク處卑近ニシテ。觀ル處壯快ナラズ。況ンヤ風俗ノ野鄙。人情ノ粗朴ナルオヤ。故ニ一日ノ閑ヲ偸テ。コノ十丈ノ俗塵ヲ避ケ。萬里ノ白雲ニ遊ビ。以テ余ガ心身ヲ快活ニセンモノヲト。閑吟節ヲ曳テ爰ニ到ル。然ルニ未ダ踏マザルノ地。未ダ見ザルノ逕。東西其行ク處ヲ知ヲズ。故ヲ以テ。暫ク松根ニ箕居シテ人ノ來ルヲ待テリ。今ヤ偶尊翁ノ過ルニ逢ヲ得テ。欣喜措ク處ヲ知ラズ。乞フ幸ニ前途ヲ敎ヘ玉ヘ。老翁莞爾トシテ曰ク。子ノ志ヤ良シ。子ノ言ヤ感ゼリ。孺子敎フベシトテ。一一其往クベキ處。望ムベキ處。觀ルベキ處。倚ルベキ處ヲ以テス。余ノ喜ビ實ニ大ナリ。懇ロニ禮ヲ爲シテ別ル。是ヨリ崎嶇凸凹ノ間。巉岩嵯峨ノ上ヲ行クコト。蓋シ幾里ナルヲ知ラズ。◎忽然トシテ溫暖和煦ノ境ニ入ル。足既ニ爰ニ到テ。疲勞ノ頓ニ身ニアルヲ忘ル。即チ一望スルニ。巍然峨々タル山峯ハ。白雲ヲ冠ト

シ。雲霞ヲ帶トナシテ。聳立シ。瀰々洋々タル河水ハ。幾條トナシ。晴嵐ヲ率テ流ル。森林丘陵ニハ。異草珍木ノ群ヲナシ。千紫万紅ノ叢ヲナセリ。芳鳥美禽ノ綿蠻タル。瀏喨タル。遠ク野外ニ餘音ヲ引キ。痴蜂狂蝶ハ。花間ニ周旋徘徊シテ。翻々影ヲ弄スルアリ。遙ノ海灣ニハ。幾百トナキ軍艦商船ノ碇泊シテ。宛然海上ノ林カト疑ハレ。鐵柱石樓檐ヲ列ヲテ雲ニ聳ヘ。幾千トナク幷ビ立テルハ。櫛ノ齒カト怪マル。其他滊車ノ奔飛スル。電線ノ網ヲ張ル。或ハ幾百ノ標旗閃々客ヲ招キ。或ハ幾千ノ烟筒四方ニ淡煙ヲ噴ク。見ル處トシテ奇絶ナラザルナク。望ム處トシテ快絶ナラザルハナシ。抑モ余ノ老翁ノ指敎ニ隨テ。コノ佳境ニ入リ來ルハ。夢ニ非ザレバ現カト。吾身ヲ一捫スルニ至ル。想フニ此境ノ如キハ。殆ンド人界ニ非ザルニ似タリ。曾テ寫眞境裡ニ見ル處ノ。文明國ニ非ザルヲ得ンヤト。獨語シツヽ益佳境ニ入ル。到レバ都人男女。余ヲ認メテ迎ヘ。疑フモノヽ如ク。相率ヒテ余ニ尾シ來ル。忽チニシテ。練瓦石樓ノ前ニ至ル。鉄柵普ク繞ラシ。白堊日ニ映ジ。庭蕭然。華麗眼ヲ眩セリ。既ニシテ一婦人。門頭ニ來ル。髣髴トシテ新月ノ霞ヲ出ヅルガ如ク。宛然仙鶴ノ門前ニ立ツニ似タリ。年齡三十許。濃粧セストモ。冷淡自ラ雪ニ似テ。玲瓏恰モ玉ヲ欺ク。眉ハ柳翠ヲ畫キ。鬢ハ綠雲滴ラントス。秋波酷ダ冷カナレトモ。中ニ烱々人ヲ射ルノ威風アリ。纖々タル細腰ニ。長裾ヲ曳キ。蓮步ヲ移シテ余カ前ニ來ル。香氣先ツ人ヲ醉ハシム。余ニ謂テ曰ク。子ハ何處ヨリ來ルヤ。コノ境ハ是レ文明國ノ都府ニシテ。百貨流通。學藝極メテ盛ナリ。予若シ文明國ノ眞趣ヲ知ラントト欲セハ。請フ之ヲ語ラント。余ヲ引テ樓ニ登ル。余爰ニ於テ心動キ。胸悸シ。僅ニ一禮スルノミ。一言ノ以テ口ニ發スルヲ得ス。唯竊ニ想フ。是所謂文明國ノ良妻。文明國ノ賢母ナルコトヲ。婦人先ツ長椅ヲ余ニ薦メ。且ツ日ク。妾ヤ今日偶々日曜ニ逢ヒ。上帝ヲ拜スルノ後チ。三兒女ヲ伴ヒ。園中ヲ逍遙シ了リ。今マタ予ノ天涯ヨリ光臨セルニ逢ヒ。實ニ手ノ舞ヒ。足ノ蹈ムヲ知ラスト。余先ツ立テ四方ヲ眺望スルニ。樓ハ小丘ノ上ニ屹立シテ。華園芥芳其後ヲ繞リ。細流滾々其前ヲ流ル。遙ニ望ム處ノ山河海灣ハ。宛然璨窓ノ邊ニ卒マリ。清絶秀絶。呼ヘハ應エントス。又左傍ニ大玻瓈鏡ヲ掛ク。壁上ニハ扁額ヲ掲ケ。題シテ曰ク。文明母是邦家柱。產ニ此文明世界ニ來ル。ト讀了テ。益文明國ノ狀況ニ心醉セリ。余爰ニ於テ。心胸始メテ定マリ。徐ロニ婦人ニ謂テ曰ク。余ハ邊陬ノ一漁夫。一日ノ閑ヲ偷テ白雲ノ間ニ遊ビ。以テ心身ヲ快活ニセント。途ニ老翁ニ逢ヒ。其指敎ニ從テ。爰ニ至ル。圖ラザリキコノ佳境ニ來ラントハ。見ル處トシテ壯快ナラサルナク。聞ク處トシテ欣躍ナラサルハナシ。今又コノ扁額ヲ讀ミ。寔ニ文明國ノ心髓ヲ知ルニ足ル矣。是ヨリ文明國ノ文學發達ノ實歷ヨリ。文明國ノ母ノ兒

女教育ノ方法等ヲ聞ク。婦人諄々トシテ説キ。更ニ倦怠ノ色ナシ。既ニシテ時大ニ移リ。黄昏ノ月。早ク東山ノ上ニ斜メナリ。婦人立テ書架ヨリ。一巻ノ册子ヲ抽キ來リ。余ニ示シテ曰ク。コレ妾等ノ常ニ發兌スル處ノ雜誌ナリ。乞フ一讀ノ榮ヲ玉ヘト。余喜テ之ヲ採リ。通讀一過嘆賞錯ク處ヲ知ラス。其社説ノ巍峨莊重ナルハ。彼ノ山巒ノ儼然タルカ如ク。其論説ノ奔放流暢ナルハ。彼ノ河水ノ洋々タルカ如ク。家政ノ緻密周到ナルハ。彼ノ蜂ノ花ヲ探ルカ如ク。其文藝ノ斬新精彩ナルハ。彼ノ花ニ戯ルヽ蝶ノ如ク。其批評ノ綿密適切ナルハ。彼ノ明鏡ノ如ク。其小説ノ潔白清淨ナルハ。彼ノ娥眉ノ如ク。其雜錄ノ爛然燦然タルハ彼ノ百花ノ如ク。其彙報ノ劉朗清肅ナルハ。彼ノ好鳥ノ如シ。余爰ニ於テ。覺ヘス肉飛ビ眉動キ。節ヲ擊ツコト數回ナリ。余曾テ聞ク。山水秀靈ノ地ニハ。必ス偉人ヲ生ズト。今コノ清淑ノ氣。磅礴シテコノ貴孃トナリ。コノ雜誌トナル。又何ヲ深ク怪ムニ足ランヤ。婦人呵々トシテ笑ヒ。過奬敢テ當ラス。漸顏紫ヲ發スルノミト。尋テ婦人酒肴ヲ呼ヒ。余ヲ饗ス。甘露ノ酒。八珍ノ味。余カ腹蟲ノ驚悸。又想フニ足ルベシ。時ニ鏘々耳ヲ貫ク。忽然トシテ。甘眠ヲ覺サル。是ナン。南柯ノ一夢ニシテ。四壁蕭條。柱漏正ニ五點ヲ報ジ。机上唯一册ノ文明之母アルヲ見ルノミ。』

# 北陸婦人教會雜誌第三號目錄




石川縣金澤市西町三十六番地

本願寺廟所內　北陸婦人教會本部

# 少年文武

毎月十五日發行●一冊金八錢●半年分前金四十五錢●前金に非れば一切發送せず●爲換は神田郵便局宛●彩裝美本●無類の少年雜誌

第一號目次●百英傑圖●少年文武發行主旨●論說一利一害 天台道士●少年文武發行に就て 天葩居士●少年寶庫（此欄は本誌の特色）普佛戰爭 局外生 理科春秋 中川重麗 熊澤蕃山傳 太華山人 活木馬 反譯●懸賞少年演說會發開式●繪畫會畫題 明治書生風俗 文藝會談話會 笑覽會（是は餘程面白き物）●雜錄 水上自轉車●化學妖術●自轉獨樂●外數件と 滑稽繪卷物●雜報 煨諸と薤●文星運行●五色書生●熊狩●蜘蛛は主想家●大相撲等數件●附錄 少年小說 初旅 饗庭篁村 獨逸シルレル傑作演劇 自由之一箭 春の屋主人序 河竹默阿彌序 霞城山人譯（挿畫廿二）

發行所 東京神田區駿河臺西紅梅町十三番地 張弛館

●賣捌 各地方雜誌店

## ●廿三年新刊書豫約廣告●期限後ハ必ス正價ニ復ス

矢野龍溪先生閲、井上寛一、枝元長辰、村井寛君同編　每年一月刊行

# 本年新版 内外百事便覽

最上等洋裝美本總クロース
金文字入紙數五百頁餘
正價金七十五錢
豫約廉價金六十五錢
郵送費金十錢
申込期限二月十五日
送金郵便爲替（本局宛）又ハ通運便
送本一月七日ヨリ
部數二千部限

廿三年ノ新版出來致候大ハ海外萬國ノ形勢ヨリ小ハ國内日用ノ百事ニ至ル迄一書ニ網羅シ遺ス所ナキハ歐洲諸國ニ行ハル、「アルマナツク」ト題スル書ニ〆此一書ヲ座右ニ備フレバ年中百事ヲ閲覽スルニ於テ其便言ベカラズ故ニ諸國ニ於テ每年年首ニ其刊行アルヤ人ト〆之ヲ購ハザルハナク戸トシテ之ヲ藏セザルハナシ百事便覽ハ即チ是レト類ヲ同クスルモノナリ矢野龍溪先生ノ注文ニテ昨年ノ始メ本書第一回ヲ出版セシニ果シテ好評ヲ博レ廣ク江湖ニ行ハル本年ノ新版モ豫定ノ通リ此度發兌ノ運ビトナレリ前版ニ比スレバ最モ正確ニ最モ新レキ事實ヲ選ビ殊ニ全世界統計ノ部ニ著レキ改良ヲ加ヘ紙數モ亦タ百頁餘増加セリ其事項件數ノ多キ事知ルヘレ且ツ其定價モ前版ハ九十五錢ノ處新版ヘ九十錢ニ引下ケ尚ホ御便利ヲ相謀リ來ル二月十五日迄ニ申込アル愛讀諸君ニ限リ特別廉價ヲ以テ販賣可仕候間陸續御申込アランコトヲ冀望ス

**發兌元報知社**　豫約出版申込所　東京日本橋區大傳馬町二丁目二十二番地　**書林長島恭三郎**

豫約申込所　東京丸善●博聞社●敬業社●集成社●辻文●三友●吉川●大倉●林平●大坂松村●熊本長崎●山形五十嵐●福嶋萱間●名古屋川瀨●長野西澤●越後水原西村、埼玉長島、其他各府縣書林

明治廿三年一月廿五日印刷出版

（遞信省認可）

（東京市京橋區瀧山町七番地滋賤社印行）